



富山国際大学 子ども育成学部

2021年度

研究交流活動年報

子ども育成研究交流センター

2022年8月



目 次

「研究交流活動年報」の発刊に寄せて・・・・・・・・・・・・・・・・	1
1. 第12回子ども育成フォーラム（詳録）・・・・・・・・・・・・	2
「コロナ禍における学校教育～ICTの活用」	
2. 第13回子ども育成フォーラム（詳録）・・・・・・・・・・・・	8
「教育や保育の実践に生かす特別支援教育の視点」	
3. 2021年度 第1回研究交流サロン・・・・・・・・・・・・・・	16
「合同研究の始まりと研究交流サロンでの交流記録」	
4. 2021年度 第2回研究交流サロン・・・・・・・・・・・・・・	24
「授業改善あれこれ」	
補遺： 子ども育成学部公開講座のあゆみ・・・・・・・・・・・・	35

研究交流活動年報の発刊に寄せて

子ども育成研究交流センター長 辻井 満雄

富山国際大学は、「共存・共生の精神と知性を磨く教育を基本に、時代の潮流に対応できる、健全にして個性豊かな人材を育成して、国際社会及び地域社会の発展に寄与する」を基本理念に掲げています。

それを基に、子ども育成学部は、地域における人材の拠点として、知的財産を地域社会に還元する活動や地域の様々な人的・社会的資産を教育に活用する等、地域との双方向的な連携を進めてきました。そして、「教育と福祉のハイブリッド」を特色に、明日の保育・教育・福祉を担う専門職の育成を目指し地域社会の教育研究と地域貢献に努めてきました。

研究交流センターは、子供にかかわる今日的な課題をめぐって、保育・教育・福祉などの分野で地域の関係者の皆様と共に実践や研究の成果を交流し、これからの子ども育成の在り方を探っていくことを目的とする地域貢献活動として「子ども育成フォーラム」等を開催してきました。これら一連の事業を通じて、地域密着型の学部として、一層人材育成の拠点としての役割を果たすべく全力を挙げていく所存です。

本年報では、フォーラムの詳細だけではなく、学部の教員間で行なっている「研究交流サロン」の記録も掲載しました。この年報が本学部の地域交流活動を広く地域社会に周知する一つのツールとして、また本学部教職員・学生の活動内容から新たな活動の方向性を見いだすツールとして活用されることを期待しています。地域の関係者の皆様が、子供たちをめぐる現状と課題を正しく認識し、家庭、地域、施設（事業者）、行政などの関係者とともに、課題解決に向けて広い視野に立つ見識に繋がることを願っています。

富山国際大学開学 30 周年 第 12 回子ども育成フォーラム

テーマ 「コロナ禍における学校教育～ICT の活用」

日時：2021 年 3 月 20 日（土）午後 1 時 30 分～3 時

*ZOOM（オンライン）ミーティングにて開催

講師：小田 仁洋 氏（富山市立速星中学校 教頭）

主催：富山国際大学

後援：公益財団法人富山ひとづくり財団

2020 年に全世界を巻き込んだ新型コロナウイルスの感染拡大は、2021 年になっても終息の兆しが見えません。非常事態宣言等によって子どもたちの登校が禁止された時、日本国内の小中学校は、登校に代わる通信教育を直ちに提供できる体制が十分に備わっていないことがわかりました。そこで、まさに今、学校教育における ICT の活用が、これまでも増して大きな課題となっているところです。

本フォーラムでは、ICT を活用した先進的なやり方でコロナ禍を克服しようと、独創的な教育実践に取り組んでおられる富山市立速星中学校の小田仁洋教頭先生をお招きし、具体的な教育実践や生徒たちの様子についてお聞きすることにより、平常時および非常時の学校教育における ICT の活用のあり方について共に学び、考えていきたいと思っております。

福島：ただ今より富山国際大学開学 30 周年を記念いたしまして、第 12 回子ども育成フォーラムを開催いたします。

本日の司会進行は、子ども育成学部研究交流センターの福島と村上教授が務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは学部を代表しまして、辻井学部長よりご挨拶申し上げます。

辻井：今日はご多用のなか、たくさんの参加をいただき感謝申し上げます。子ども育成学部は教育と福祉のハイブリッドを掲げ、保育、教育、福祉を担う地域に貢献できる専門職の養成に取り組んできました。また、知の拠点としても、地域に根ざした教育、研究、社会貢献のため、子どもをめぐる今日的課題に向け、真摯に取り組み、地域とともに成長していきたいと思っております。

この子ども育成フォーラムでは、子どもの育成をめぐる今日的課題について原理的、多角的に考察し、課題解決に向けての展望を模索することを目的としております。今回は、富山国際大学開学 30 周年記念フォーラムとして「コロ

ナ禍における学校教育～ICT の活用～」を掲げました。新たな時代に育つ子どもたちに、未曾有の困難に立ち向かい、生きる力を実現するためにも大切なことだと思います。

そこで、富山市立速星中学校教頭、小田仁洋先生を講師にお招きし、ICT という切り口を通して示唆をいただけるものと思っています。

どうぞよろしくお願いいたします。



福島：それでは、小田仁洋先生にご講演いただきます。よろしくお願いいたします。

小田：皆さん、こんにちは。開学 30 周年記念、大変おめでとうございます。本当は講義室で、皆さんを前に話をしたいのですが、今日はオン

ラインにて行わせていただきます。授業や講演では、生徒の反応を見ながら、微妙に話す内容を変えるのですが、今日は皆さんの反応が見られず残念ではありますが、これまでの取り組みを紹介しながら、精一杯伝えたいと思います。

黎明期の学校ホームページ

私が教員生活を始めたのは、今から約 20 年ほど前ですが、コンテンツといえば、当時は画像とテキストが中心で、アニメーションなら GIF アニメというものでつくっていました。

現在は、画像、テキストに加えて、保護者への配布ならば PDF、そして動画。ご存じのとおり、パスワードをつかって、保護者だけ、生徒だけに閲覧できるようにしているところです。

ホームページの容量では、20 年前は 10MB(メガバイト)で、過去データを削除していかないと、すぐにいっぱいになってしまって、非常に大変だったのを覚えています。10MB といえば、今は、スマホの画像 1 枚分です。現在の富山市内の小中学校は、上限なしで、しかも過去のデータ、ホームページに挙げたデータはすべて蓄積され検索ができるという非常に便利なシステムになっています。HTML の直接編集というのは、ちょっと知識が必要なのですが、今の中学校、小学校のホームページ作成は誰にでも簡単にできるようになっています。

最近、修学旅行先や校外学習先からでも直接ホームページを更新することができます。非常に便利な機能が付いているので、子どもたちの様子を保護者は、写真や動画で簡単に見ることができるようになっているわけです。

その他、当時は、管理職から印鑑をもらわないと全く更新できず、遅いときは、3 日程かかっていた時もありましたが、今はオンラインでスピード承認され、非常に便利な世の中になったなあと感心させられます。

平成 15 年県内で学校行事の動画配信を開始

学校行事の動画をいつからアップし始めたのかということについてですが、動画をアップしている全国の学校を参考にしながら、富山県内でも進めてきたと思います。

具体的には、平成 15 年に試験的に開始しました。配信方法は、ストリーミング再生で、WMV という形式を使うと上手くいくということが分かり、それを採用することとしました。

それから、大切なこととして、よく言われる生徒の「肖像権」。保護者や本人の承諾を得ないとホームページ上にはアップできないんですね。

本人とは分からないように解像度を下げるとか、全体の様子が分かるように遠くからの撮影を行う等、いろいろと配慮が必要となりました。

それから、「著作権隣接権」。これは何かというと、動画を配信する際に、その動画自体の著作権は学校長が所持しているのですが、楽曲の使用によっては、隣接権の支払いが発生してしまいます。JASRAC に権利のあるものであれば、問い合わせで支払わなければいけません。

ただ、クローズド、つまり、ID やパスワードで保護されたページでの公開であれば関知しないということで、クローズドで対応しました。

それには、やはり管理職の理解というものが必要になってきます。管理職には当時、「開かれた学校にしていくためにも、非常に有効です。」という話をした覚えがあります。

何よりも、動画配信を行うことで、ホームページのアクセス数が増加していきました。

休業中でのメッセージ動画作成がチカラに

今思えば、新型コロナウイルス感染拡大のため、休校措置がとられたちょうど 1 年前、卒業生へのお祝いメッセージに動画を作成しようという流れがあったからこそ、現在のオンライン授業にも対応できる力がついたと思います。

コロナ禍のオンライン授業等の取組

では、コロナ禍のオンライン授業がどのように始まったのか、についてお話しします。

まず、「自宅に Wi-Fi 環境が整っていない生徒への配慮をどうするか」の議論を始めました。

次に、教科書の内容を進めるのではなく、復習や補充を重点に、興味・関心を高める内容という共通理解のもとに動画を作成することにしました。制作にあたり手順を始めから決めなかったことで、多様な制作手法が編み出され、次々にオンライン動画が自主的に作成され続けました。今回の臨時休業中のオンライン授業で作成された動画は、次年度以降も、アーカイブスとして復習や確かめにも使えるようになります。

ここで、動画作成の手法を紹介します。1 つ目は、PowerPoint や Keynote で簡単にできます。2 つ目は、ビデオカメラに向かって、いつもの斉授業のように黒板を使つての動画作成では、適切なものができるまで何度でも録画し直すことができます。3 つ目は、編集が得意な若手教員に教科のプリントを渡し、動画を作成してもらう方法。4 つ目は、左手でスマホを持ち、右手でペンを持ち、自らの説明で動画を作成する方法です。5 つ目は、本格的動画編集ソフトを活用して動画を作成する手法です。

また、本校では、制作されたオンライン動画は、教職員で共有できるため、お互いにコメントし合うことで、私も作ってみたいという話にもつながっていきました。

さらには、臨時休業中における朝学活や PTA 総会もオンラインで実施しました。その他、学校評価アンケートもオンライン化を進めてみました。始業式や受賞報告などを行う際も、全教室に設置された 65 インチの大型モニターでライブ配信にて見るができるようにしました。

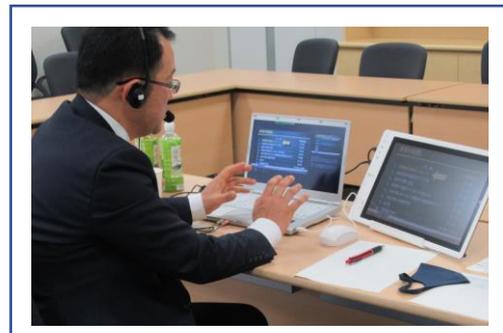
生徒、保護者によるアンケート結果からは、良い評価も悪い評価もありましたが、「幅広い作成方法が生まれた」、「主体的な学びが広がった」、

「ICT のハードルが下がり、活用場面が増えた」、「1 人 1 台のタブレット端末の配布後、対応していけるという子供の自信につながった」、「集会のあり方も見直すことができた」といった内容の意見が見られました。一方では、やはりまだ、「自宅でタブレット端末を使うことやネット環境への不安が残る」という意見もありました。

家庭の「ICT・ネット環境の差」が、やはり課題だと思われます。富山市では、1 人 1 台タブレット端末を持ち帰る際には、準要保護・保護家庭には、モバイルルーターが貸し出される予定となっています。

コロナ禍の「美奈子学」との出会い

では、最後に、コロナ禍の「美奈子学」をご紹介します。本校の卒業生で、ニューヨークで活動する彫刻家、吉野美奈子さんが、コロナ禍のため、富山で足止めされた際、講演を依頼したところ、快諾に至り来校の実現に至りました。非常に素晴らしい内容でしたので、ご紹介したいと思います。



まず、1 つ目が、コロナ禍であっても、「水のように柔軟に」と。水はどんな風にでもなります。変化の激しい世界や世の中でも、変化を恐れない勇気を持つことが必要だと教わりました。

2 つ目は、「やっていることすべてに意味がある」と考えることだとおっしゃられました。「未来にすべてつながっています。ですから、無駄なことは、ひとつもないということです。」と。

3 つ目は、「自分で考えて決める」。Follow your heart。他人に左右されない自分づくり、自分で考える、誰かに左右されないということが、非常に大切なのです。」と。

このようなコロナ禍であっても、皆さんもこの 3 つを大切にしていだきたいと思います。

もうお時間となりました。本日は、貴重な機会をいただき、本当にありがとうございました。

村上：今回、小田教頭先生のコロナ禍における様々な切り口からの実践報告を拝聴させていただきました。感動いたしました。本当にありがとうございました。ここで質疑応答に入ります。

質疑応答

Q1: ビデオによる授業がとっても印象的で、凝ったビデオもお作りになられて、とてもいいなと思ったのですが、学校の休業が決まってからどのくらいの期間で、ビデオによる授業が配信されるようになったのですか。

A1: 10 日間ですね。何かをやらなければいけない、でも、何も見えない、霧の中に放り出されたわけですね。1 週間過ぎてみて、この先どうなるか分からない時に、やれることをやってみようということになり、動画配信を決め、第 1 本目の動画が始まりました。

Q2: 授業時などにおいて、生徒も動画を作成することで、学びを深めたりするといった活動はあるのですか。

A2: これはいい視点だと思います。GIGA スクール構想によって、ようやく本校でも 1 人 1 台、タブレット端末の配布が完了したところです。そこで、このタブレットにはカメラが 2 つ付いていますので、これを活用して自分で動画を撮影して配信するということが可能になってきます。また、それを使った学習コンテンツとして、教員がピックアップし、つなぎ合わせたり、紹

介したりすることも可能になってくると思いますので、そういう授業も増えてくるのではないかと思います。今はまだないですが。

村上：より生徒による主体的な取り組み方が可能になってくるということですね。

Q3: GIGA スクール構想の話も出たのですが、タブレット端末が配布された際、教員側はどんな準備をして、生徒に接していったのでしょうか。また、教員はタブレットを効率的に使うために、どのようなスキルを身に付けなければいのでしょうか。何か勉強する機会が先生方には、用意されているのでしょうか。

A3: これもいい視点ですね。我々教員も初めてなので、研修会が設けられています。そういったスキルを身に付けるための技術者を学校に派遣して研修会を継続的に 1 週間に 2、3 回来ていただいて、誰でもいつでも聞ける機会を設けることもあります。おそらく大学のカリキュラムにもこれから入ってくるのではと思います。

生徒は、必ず 1 台持っていますから、これを活用しないという選択肢はないのです。「アナログ人間」と自称される方、「文系」と自称されている方も積極的に使っていく必要がありますね。自分の発想をぜひ生かしてほしいなと思います。

Q4: ドローンを飛ばす検定を取ったり、美術部がコンピュータで絵を描いたりしていると聞いて、すごくびっくりしたのですが、それは生徒が自分でやりたいって言い出したのか、先生が「こういうのあるんだけど」っておっしゃったのでしょうか。

A4: ドローンについては「やらないかい？」と私が指導しました。現在 23 名のコンピュータ部員がドローン検定を取得し、日々操縦の練習をしています。美術部のイラストは、趣味でや

っている生徒がいたので、コラボレーションが実現しました。

Q5：先生もそういうのを専門にされているということですか。

A5：私も生徒と一緒にドローン検定会場に行ったんです。会場では、隣の生徒とともに、「私も受検生です。」というわけです。一緒に勉強して、無事受かりました。

Q6：一緒に学んでいくことが大事ですね。

A6：そうです。私もゼロからなので、すべて。子どもたちと一緒に学びながら、私も一緒に学ぶという。このスタンスが一番重要じゃないかなと思います。

Q7：動画配信というのは、教師側から生徒に対してのものだと思うのですが、生徒側から返してくるものをどのような方法で、キャッチなされたのでしょうか。

また今回、あくまでも臨時休校ということだったため、「教科書は進まない」という方針を立てられたと思うのですが、もし、半年ぐらい休校にしなくちゃいけないというような状況になった時は、どういった方策が考えられるのでしょうか。お教えいただきたいです。

A7：2か月間の動画配信に関しては、これは完全にYouTubeの限定配信なので、完全に一方です。双方向というのは、これからのキーワードになってくると思います。

前回、どうしても教科書を進めなかった理由というのは、子ども達のICTの環境に差があったからです。いろいろな環境の中で、「できない」に焦点を当てるのではなくて「やれることをやった」ということでしょうか。

また、教室にカメラを設置することで、教室には行けない生徒でも、相談室や自宅で見たり

すること、担当教師の授業を一斉に時間を決めて、配信することも可能だと分かりました。

それから挙手をする、質問する、あとチャットで投げかける、発表するというのもできるので、これは、半年ぐらいの休講になっても、おそらく、この1人1台タブレットのGIGAスクール構想によって、ほぼカバーできるのではないかなと思います。

Q8：タブレットでは、どうしても人とのコミュニケーションが取りづらいため、意欲がなくなっていく生徒がいるように思います。自分も大学1年間、こういったZoomを使ってみて、改めて、人との関わりがない分、意欲もなくなってしまふなというところがありました。

そういった生徒に対しては、どのように指導されているのか、教えていただきたいです。

A8：人と人とのコミュニケーションやアナログというのは、非常に重要だと思っています。

機会を設けて、ICTばかりにならないように、人と接する機会を大切にしていこうということは、これから我々も気をつけていかなきゃいけないし、生徒とはこれからも積極的に関わっていけばいいのかなと思っています。

人間というのは、人のぬくもりを感じられなければ生きていけないと思っています。あたたかい言葉がけであったり、それから、ちょっとしたハンドシェイク、握手して励ましたり、表情とか、「君のやっていること素晴らしいね」とか、そんな言葉がけは、もちろんチャットとかLINEやSNS、Zoomでも伝えられると思うのですが、やっぱり面と向かって触れ合うところでしか、私は醸成されていかないと思います。

その上で、ICTをしっかり使っていくということ、是非子ども育成学部の皆さんにも、大切な視点として持っておいてほしいと思います。

次世代を担う学生に向けた“エール”

村上：最後に、今ほどのやりとりの中でも出てきたのですけれども、子ども育成学部の学生は、やはり子どもに関わる専門職、子ども育成に関わる専門職として、社会へ巣立っていきます。

まさに昨日、学位記授与式があり、4年生は卒業したばかりです。そこで、小田先生から一言、エールという形で、これからのICTと人とのコミュニケーションのあり方といったことも含めまして、最後にメッセージを頂戴して、質疑応答を終わらせていただこうと思っております。先生、どうかよろしく願いいたします。

小田：皆さんは、今まさにこれから社会に旅立っていくところだと思います。子どもに関わるというか、人を育てるという仕事は、本当に大変な仕事です。私も身をもって感じています、いわゆる我々の仕事、学校や子どもを育成していく立場の人間というのは、やはり“志願兵”でないといけないと思うのです。ただなんとなくこの仕事に就いたのではなくて、自分がやりたいと志を持って教員になったんですよね。ですから、その志を大切にしてほしいと思います。

それから、最も重要なのは「自分で考える」ということです。「自分で考える」というのは、「他人の指摘を受け入れない」のではなく、いろいろな情報をすべて統合して受け入れた上で、自分で判断するということですね。そうであれば、のちのち自分で判断したことだから、必ず自分で責任を持って、突き進んでいけるはずなのです。間違っていれば、修正すればいいのです。でも、その行動を起こす前に、「自分で考える」という一番大切なところをおろそかにしてしまうと、人のせいになってしまうのですよね。

それは、絶対に避けてほしいと思います。

ですから、必ず、自分の頭で考えて行動してください。それが一番重要かと思います。いかがでしょうか。皆さん。

村上：小田先生ありがとうございます。“志願兵”であれと。志をしっかり持って、自分の頭で、そして、自分で考えるということが、やはり大事なんだという言葉が最後にいただきました。いろいろなご示唆も本日はいただきました。

それでは福島先生にお返ししたいと思います。

福島：講演をしてくださった小田仁洋先生、どうも本当にありがとうございました。また、機会がありましたら、是非とも大学でご講義賜りたいと思います。

本日は、外部の関係者の方はじめ、学生の皆さんもあわせると、約150名の方が参加してくださいました。改めて、皆さまに、心から御礼申し上げます。

最後になりましたが、子ども育成フォーラムは、今回で12回目を迎えております。毎年1回開催しておりますが、今後もその時社会が抱える重要な課題を取り上げ、皆さんとその問題を共有し、今日のように話し合いをかさねていけましたらと思っております。

小田先生、本当にありがとうございました。

(文責：村上 満)

第13回子ども育成フォーラム

テーマ

「教育や保育の実践に生かす特別支援教育の視点」

日時：2021年11月27日（土）午後1時～2時40分

場所：富山国際大学子ども育成学部 E館 7階（701～704）

講師：柳川 公三子 氏（富山総合支援学校教諭、
現・金沢星稜大学講師）

講演題目：『子供の主体的な学びに寄り添いながら、一人ひとり「できた！わかった！」へ誘う教師の「授業デザイン力」～ 特別支援教育の視点を踏まえて～』

主催：富山国際大学

後援：公益財団法人富山ひとづくり財団

近年、初等教育や保育の現場において特別な配慮を必要とする子どもが増加し、環境構成や授業のあり方などに苦慮する教員が増えています。新任の保育士や教員がこの面での専門性を向上させることも喫緊の課題となっています。本フォーラムでは、特別支援教育の専門家であり、その現場に精通しておられる柳川公三子先生をお招きし、初等教育や保育において特別支援教育の視点をいかに生かすべきかについて学びたいと思います。

福島：ただ今より第13回子ども育成フォーラムを開催します。開会にあたりまして宮田徹学部長よりご挨拶申し上げます。

宮田：本日はご多用のなか参加をいただきまして本当にありがとうございます。富山国際大学子ども育成学部では、教育、保育、福祉の専門職養成に取り組んできました。そして高等教育機関の使命である「知の拠点」として、地域に根ざした教育研究社会貢献活動を推進してまいりました。

この子ども育成フォーラムは、子どもの育成をめぐる今日的課題について原理的、多角的に考察し、課題解決に向けての展望を深めることを目的としています。昨年度はコロナ禍によりオンライン開催でしたが、今年は対面で開催できることを本当に嬉しく思います。本日は柳川公三子先生にご講演頂き、初等教育や保育において特別支援教育の視点をいかに生かすべきかについて、参加者の皆様とともに学びを深めた

と思います。どうぞよろしく願いいたします。

福島：ご講演に先立ちまして柳川先生のご紹介をします。現在、富山の総合支援学校にお勤めですが、これまで数多くの研究を発表していらっしゃいます。その詳細は割愛させていただきますが、近年は特別支援教育の必要な子ども達のキャリア形成に尽力されていまして、キャリア発達支援研究会の富山支部代表、北陸支部副支部長としてご活躍です。

なお、皆さまの自由な発想を大切にしたいという柳川先生のお気持ちから、特に学生の皆さんにはワークシート以外の資料は見ないようにしてご参加いただきたいとのことです。

柳川：今日は、主体的な学びって何なんだろう、どうしてそういうことが必要なんだろう、それを実現するためにはどうしたらいいんだろうということをお話させていただこうと思います。

これからの教育にもとめられることは？

全国どこで教育を受けても一定水準の教育が受けられるように学習指導要領が定められています。約 10 年に一度、時代の流れや社会のニーズに沿って見直しと改定が行われています。

今は、科学技術開発の変化が速く、子ども達が将来どんな仕事をして、どんなふう生きていくのか、簡単に予測できない時代です。そんな社会を生き抜いていくために「生きる力」を育てることが重要だと言われているわけですが、どんな力を生きる力というのかがとても大事だと思います。

文科省では、「社会的・職業的自立に向け、人生を切り開いていく力」、「対話や議論を通じ、多様な人々と協働できる力」、そして「変化の激しい社会の中でも、新たな問題の発見・解決につなげていく力」と説明されています。



これまで重視されてきたように、色々な知識やスキルをより多く身につけることはもちろん大事なのですが、それだけではなく、他者と尊重し合って生きていく力がこれからの時代には大切になっていくのではないかと思います。

これまででは何を学ぶのかを中心に学習指導要領が書かれていましたが、新しい方向性として、「何ができるようになるか」ということが重視されています。自分が身につけた知識やスキルを活用して人生や社会に生かそうとする力、そういう人間性がすごく大事だと私は思っています。

主体的な学びとは？

主体的な学びとはどんな学びだとお考えですか。3 分程度で書いてみてください。その後で対話を通してどれだけ考えに広がりがあったのかを見てみてください。

「主体的対話的で深い学び」について、田村学先生（2021 年）は、「学習する子どもが知識や情報をインプット（内化）し、それをアウトプット（外化）する認知プロセスを活性化すること」だとおっしゃっています。私達は、これまでのインプット中心の考えから、アクティブラーニングへと私達の意識を転換していくことが必要になります。

子ども自身の意志で自覚的・目的的に学びを進める。さらに、友達や文献などから情報を得て、それを他者に伝えたり表現したりといった対話的で協働的な学びをしながら、自分自身の新たな知を創造していく。そういった対話的な学びで頭をフル回転させることによって、バラバラな知識がどんどんつながってネットワーク化していき、深い学びが実現されるということになるのではないかと思います。

今、求められる教師の資質とは？

主体的対話的で深い学びは、どうやったら実現できるのでしょうか。中教審答申（2016 年 12 月 21 日）では、「教員が教えることにしっかりと関わり、子供たちに求められる資質・能力を育むために必要な学びの在り方を絶え間なく考え、授業の工夫・改善を重ねていくことである。」と述べられています。それから、奈須先生（2017 年）は、学校と教師の「創意工夫に基づく指導方法の不断の見直し」が重要であり、それは「授業研究」によって効果的に成し遂げられるとおっしゃっています。

これらのことから考えると、主体的対話的で深い学びの実現には、私達教師が子どもの学びの在り方をよく考えて授業を見直すことが必要

になるのではないかと考えます。そういった意味で授業研究がとても重要になります。そして、その授業研究で、私達が子どもの学びの過程を捉える力を高めていくことが求められていると考えられます。

竹村先生(2021)がこんなことを言っています。学びには二つあって、一つは勉強の学び、もう一つは主体的な学び。学びの見通しにも二通りあって、勉強の学びでは教科の授業設計の目標が見通しになりますが、主体的な学びの見通しは授業デザインのアプローチである。私達は、勉強の見通しを立てて今日の達成に向けて授業を考えてやるわけですが、状況に応じて学びをデザインする必要があるということです。

指導案においてどんなに一生懸命いろんなことを想定していても、その枠から外れた発想をしたり、意見を言ったり、行動したりする子どもは出てきます。教師としては自身が想定した範囲で発言などしてくれると助かるのですが、子どもはいろいろ考えている。それをスルーするのではなくて、子どもがせっかく考えたこと、言ったこと、したことを大切に拾ってあげて、それを何とか今日の目標のところに誘ってあげる。それがまさしく授業デザインのアプローチではないかと思っています。

これまでお話をしたことを整理すると、主体的対話的で深い学びの実現には、子どもが学びの過程において何をどんなふうに考えたのかに着目できる教師の資質が必要なのではないか、そして、それを捉えた上で、どうやってその子の学びをデザインして今日の目標のところに誘っていくか、そういう力が求められると思います。

授業における教師の視点はどうすればいいかという点について、佐伯先生(1997年)はこんなふうに言っています。教師を含む受験勉強経験者は、What や Why を問わず、How to に関心が向く「やり方」主義の傾向が強い。多くの現役教師は、授業づくりや授業改善において

も、子ども達がより多くの知識や技能を獲得できるように指導方法はどうかあればいいのか、そんなことに主眼を置きがちになるのではないかと。

また、評価について鹿毛先生(2007)は、教師には最終的な成果のみに焦点化してしまう暗黙の評価観があるが、むしろ学習や教育の過程にこそ注目する必要がある、そういうふうにあります。結果を重視して指導方法に着目してしまうと、自分の価値基準でできたできなかったという判断をすることになり、教師として子どもの見方が固定してしまう。それでは今目指す主体的対話的で深い学びの実現は難しくなるので、子どもがどのように問題を解決しようとしているか、そこを見落とさないようにしなければならぬということです。

皆さんは光の三原色～青と緑と赤～の図を見たことがありますね。緑のフィルター、例えば緑色っぽい電気がついた部屋ではいろいろなものが緑色っぽく見え、青っぽい電気だと青っぽく見えますよね。だけど、この光の三原色を合わせると真ん中に白い部分が見えるんですね。だから、複数のいろんな人の見方を合わせることで本当の対象の姿が見れるということです。教師が一人で考えることは大事ですが、いろんな人の見方に耳を傾けるということが大事だと言えます。

鹿毛先生(2017)は、子どもの学びを見るポイントについて、事実の把握と教師自身の解釈を峻別しようとする態度がとても大事になると言っています。けれども、秋田先生(2012)によれば、経験を積むことで適応的熟達化へと向かうが、獲得だけでなく、喪失していく部分もある。知識や技能の獲得が一つの見方や方法へと制約を与えるという意味で、獲得と喪失は両義的な面を常に併せ持っている。例えば、この子は自閉症だからいつもこういうふうに行動するんだと決めつけてしまう部分が知らず知らずのうちに出てくるんじゃないかということかな

と思うのですが、そういう面があるからこそ、自分一人で多角的に子どもを見るというのは難しいことではないかと考えられます。自分の解釈を入れないで子どもの事実だけを捉えるということが、主体的対話的で深い学びの実現にはとても大事だと考えられます。

私達が授業づくりをする時には、まず子どもの実態を捉え、その上でどんな目標を立てて授業していこうかと考えて、学習内容とか活動を工夫し、そして実践します。それで、実際に今日の授業を振り返る時に、子どもができたかできなかつたかという部分に注目してしまいがちになるのではないかと思います。

では、この時にできなかつた子どもは、この授業の中で何も学んでいなかったのでしょうか。そんなことはないですよ。その子なりにいろいろと考えて試行錯誤していたに違いないんです。ここにこそ、その子なりの主体的な学びがあるんじゃないかと考えられます。ですが、特別な支援を必要とするお子さんは、自分がこんなふう考えたんだよとか、こんなふうやってみようと思ったんだよってことを言葉で説明することが苦手なので、私達教師にはとても見えにくくなってしまいます。ですから、私達は、子どもが何を考えたのか、どのように考えたのか、今日は一体何を学んで、どのように学んでいたのか、そんなふう子どもの学びの過程を捉える力がとても大切になるということが分かっていただけではないかと思います。

「子どもの学びの過程」を見るとは？

子どもの学びの過程を見るというのはどういうことなのでしょう。皆さんに実際に、どんなふう子どもの学びの過程を見るか体験してもらおうと思います。これから、特別支援学校小学部2・3年生の算数科で、時計を読もうという授業の中の1分37秒ぐらいの短い場面を見ていただきます。この学校では、子どもの学

びの過程を見る力を豊かにすることを目的とした授業研究に5~6年取り組んでおられます。

子どもの姿の事実は言動ラベルということになりますが、つぶやきとか動きとか視線とかに注目してもらってその事実を書くということと、ではなぜ子どもはそんなことをしたのかというご自身の解釈をワークシートに書いてみてください。

(DVD視聴)

この特別支援学校の先生が学び合いの場でどんなラベルを書かれたのかを紹介していきます。Aさんが8時30分と書いた場面について、S先生とT先生は同じような場面を切り取っていました。Aさんが7時30分を指すアナログ時計を見て8時30分と書いたことについて、S先生は、Aさんは短針が8を指していると思ったのではないかと解釈しました。T先生は、Aさんは短針が7を過ぎてから8だと思ったのではないかと解釈しています。

Aさんが下を向いてしまった場面について、M先生は、AさんはBさんに違うよと言われて下を向いてしまった、そういう事実を切り取って、Aさんは間違いだと言われたことが嫌だなあ、恥ずかしいなと思ったのではないかと解釈しています。また、O先生は、Aさんは合っていますと言われて前を見ていたが、Bさんの説明を聞きながらだんだん下を向いていったと少し詳しく切り取って、Aさんは何が間違っているのか分からないと思っているのではないかと解釈しています。これは一例であって、これと違う解釈があっても全然いいんです。

Aさんが8時の8を消して7を書いた場面について、P先生はBさんが7時だよと言ったのを覚えていて7と書いたのではないかと考え、R先生はCさんが直す様子を見て、7と8の間で、8ではないのなら7だと思ったのではないかと解釈しました。Cさんは12時30分と書く

べきところを1時30分と書いたんです。つまりAさんと同じ間違いをしていたわけですが、Cさんは友達の見聞きながらその場で直したんですね。その姿を見て、Aさんも直したんじゃないかというのがR先生の解釈です。また、U先生は、Cさんが直す様子を見て短針が指している薄い数字の7を見れば良いことが分かり7と書いたのではないかと考えました。

こんなふうに同じ事実でもちよつとずつ違った解釈が出てきます。この解釈の違いが、授業改善の大きな糸口になるわけです。先生方がやりとりをすることで、自分にはなかった新たな見方に気付き、次の時間の改善案が浮かんでくる。自分が見落としていた子どもの姿を見ているようで、これまで思い込みで決めつけていたのではないかと感じるようになり、もっと丁寧に子どもを見るようにしなかなければならないと実感する。自分1人ではなくて複数の目で見ることによってこういったことに気付くことができるわけです。

算数の文章問題で、4人の子どもに飴を1人3個あげると、飴は全部で何個必要ですか、という問題があったとして、あるお子さんは 4×3 は14と答えた。また、あるお子さんは $4 - 3 = 1$ と答えた。これ2人とも間違えています。間違え方が違いますね。 $4 \times 3 = 14$ と書いたお子さんは、式は合っていますが答えが間違っていますので、掛け算の九九をちゃんと覚えているかどうか気になりますね。 $4 - 3 = 1$ と答えたお子さんは、そもそも掛け算とか引き算の意味が分かっているかどうかを確認しなくてはならないということになります。こういうふうに、どんなふうにもどこで間違えたのかを事実から捉えることで、次に今度はできたよってなるための学びのデザインが分かってくると思います。

こんなふうに教師の解釈を入れなくて子どもの言動を具体的に確認し、なぜそんなふうにし

たのかと問いかけていくことで、子どもが何を学ぼうとしているのかが見えてくることとなります。それを見ることでその子なりの学びをデザインすることができるようになるのではないかと思います。大切にしたいことは、自分の見方がすべてではないということです。多様な見方があるということを念頭に置きながら子どもの事実と解釈を分けてみる。そしてお互いの解釈を尊重して他者の見方に傾聴する姿勢を持つ事が大切です。これは、教師だけではなく人が社会に出ていくときに大切となる人間関係やコミュニケーションに繋がる大事なことだと思います。

ここでもう一度、さっきの授業の続きを見ていただきます。ワークシートに事実と解釈を書き、近くの方と4人ぐらいで10分間ほど話し合ってもらいます。解釈が正しいかどうかではなく、どうしてそう解釈したのかということ聞き合ってもらいたいと思います。

(DVD 視聴とグループディスカッション)



実際にやってみてどうでしたか？自分とは違う見方とか方策に出会えたという方、手を挙げてみてください。けっこういらっしゃいますね。良かったです。

今見ていただいた場面について特別支援学校ではどんな事実と解釈が出てきたのかをご紹介します。

まず、Aさんが時計の針をぐるぐる回していた場面について、D先生は、Aさんは時計を2周回し、4時半にしてから長針を反対に回した、Aさんは短針を数字に合わせようとしたのではないかと解釈しました。これに対してE先生は、Aさんは時計を2周回し、4時半近くで短針を戻そうとした、Aさんは〇時30分の時には短針が〇時をぴったり指すと思っているのではないかと考えました。このグループでは、なぜAさんは長針を何度も回したのか、授業者に訊いてみたいと話しました。

同じくぐるぐる回していた場面について、F先生は、Aさんは時計の針を回し、1周目は4時を過ぎたあたりでゆっくりになり、2周目は3時半でも手を止めかかっていた、短針を押さえて4のところ止めようとしたと理解し、Aさんは長針が回るとき、短針も少しずつ回ること気づき、動かないように止めようとしたのではないかと解釈しました。一方G先生は、Aさんが時計を2周回して4時30分に時刻を合わせてことを取り上げ、Aさんは4時30分は4時を過ぎた時刻であるという感覚をつかんだのではないかと解釈しました。このグループではAさんは短針の動きをどう捉えているのかについて授業者に訊いてみたいと話したそうです。

これらラベルコミュニケーションと呼ばれる少人数の話し合いのあと、授業者とプロンプターを真ん中にしてアクティブリスニングという場面を作ります。ここで授業者は上で例示したような各グループからの質問を受けて自分の解釈を振り返ることになります。そして自分の思い込みや自分が気がつかなかった見方に気づき、次の授業のヒントを得るわけです。上の例では、みんなの見方や考え方を聞くことによって、Aさんは4時30分なので短い針を4のところに置こうとしていたけれど、もしかしたら短い針は4ピッタリではないかもしれないということに気づいたのではないかと授業者は考えたそう

です。そして普段、短い針に注目する機会をあまり持ってこなかったかもしれないということに気づき、次の授業では短針と長針をゆっくり動かして両方の針に同時に着目できるような授業をしたそうです。それによって子どもは、時計の針というのは長い針だけが動いているのではなくて、両方の針が連動しながら動いていることに気づくことができたそうです。

子どもの学び方は1人1人違っていて、教師が思った通りに学んでくれるとは限りません。その時に大切なのは、なぜそのようなことをしたのだろうか、子どもの学びの過程を見ようということです。

学びのデザインに向けて

では、子どもの学びのデザインってどうしたらいいのか？これは残念ながらここで答えは申し上げられないです。それは、子どもの学びは1人1人違うからなんです。先生方が目の前の子ども1人1人をしっかり自分の目で見て、なぜこんなことを言ったりしたりしているのかなというふうに捉えて、だもしたらこうしてみようと考えて働くしかないですね。ただ、基本的に本当に大事なものは、学びの過程を見ること。そして主体的で深い学びの実現に向けては、子どもが主体的な学びができるように意図的で具体的な問いを立てるということです。

例えば、体育の跳び箱の時間に跳び箱を飛んでみようとして投げかけると、子どもの意識は飛べたかとべなかったかということに意識が向いてしまいます。その時に、どうしたら高く飛べるようになるかなというふうに問いを立てたならば、子どもは自分が飛んだ時のことを一生懸命振り返ってみるでしょう。助走を勢いつけたら高く飛べたとか、手をもっと遠くにつけば飛び越えられたとか振り返り、自分で学びを進めたり知を更新したりできると考えられます。

よくあるのは、先生が「今日はこんなことをやります。こうやってこうやってやります。分かりましたか。」という課題の出し方です。その目的や方法がすぐに分かる子どもはいると思いますが、「え？何？どうすればいいの？」とドキドキして困っている子もいるはずですよ。そんなときには特別支援教育の考え方に繋がると思うのですが、やり方を示す何らかの手がかり～箇条書きで示す、写真やイラストが必要ならそれをつけるなど～を子どもの実態によって与え、そうして子どもと教師が目的を共有してその1時間を過ごすことが大事になってくると思います。

そして、理解の深まりに向けては対話的な学びをしていくわけですが、何について話し合っほしいのかという目的を明確にし、みんなで相談して知恵を出し合わないで解決できないようなことを話し合う状況を作ることが必要です。友達と協力しながら学びを深めていくことを授業の中で作ってあげることが、子ども1人1人が主体的に学ぶ、学びのデザインにつながるのではないかと考えています。

褒めてあげることも大切になりますが、何が上手だったのか、何が良かったのか、具体的に上げて瞬時にその場で褒めてあげることが大事かなと思っています。

今日の話は以上になります。この講義をご自身でじっくりと振り返ってご自分の中に起こった変化を言語化してみてください。今日はご清聴をどうもありがとうございました。

質疑応答

Q1: 特別支援学校は、自立活動という通常の教育課程とは異なる面があると思うのですが、時計で数字を読む活動の目的は、算数的な思考力を伸ばすことに意味があるのか、それとも生活の上で必要な力を身につける方に焦点が置かれているのでしょうか。

A1: どっちということはないのかなというのが私個人の見解です。知的障害があっても算数とか国語といった教科で身につけたい力というのも大切です。でも、特別支援教育の必要な子ども達は、身につけた力をつなげながら何か一つの課題解決をする時に応用活用することが苦手な人が多いですね。ですから、教科の指導の中でも知識を単体で学ぶのではなく、生活のどんなところに生かせるかということを私達は念頭に置いて、教科で身につけた力が実際の生活の中で生かせるように心がけています。それが自立活動の視点にもつながっていくと思います。

Q2: 教員同士の観察は、推察で終わってしまうと思うんです。まだ言葉が十分に使えない幼児の場合もそうです。保護者の方にも加わってもらえたら、大体の推察はつくと思うのですが、確信ではないのかなと思うんです。頑張っても頑張っても時計が読めないという状況も多分生まれてくる時に、どう考えていくといいのでしょうか。

A2: おっしゃるように、どれだけ大勢の人の見方を重ねたところで、100%これが正解だっていうのはないですね。知的障害児や幼児は言語化できないので、あくまで推測にすぎません。しかし、ある時に100%分かっていたいなくても、だから駄目というのではなくて、期限を限定せず、無限ループのように学び続けていくことを大切にしていくことかなと思います。算数などですと、前の学年で培った力を使いながら次の単元、次の年に学びます。日常生活の場面等でも、もしかしてこの間のあれってこういうことかなってつながったりすると思うのです。学びは本当に継続していくのかなと思います。

Q3: 複数の見方を重ね合わせるということが

自分にとって一番の学びだったと思います。現場では授業研修という形でないと他の先生方に自分の教室の子ども達を見ていただくことが難しいので、自分一人で複数の見方で捉えることが必要になると思います。その場合に大切にしたいと思うことを教えていただけませんか。

A3: よくあるのは、ビデオで自分の授業を録画して何回も見返してみるという方法があります。この場合は、意識して違う見方をしようということになると思いますが、自分の見方の志向性や癖がありますので、限界があります。だからいろんな見方を他者と協力しながら考えていく必要があるわけです。夏休みとかの少し時間にゆとりができる時に、本当に気心知れた仲間と、授業でこんなふうに悩んでビデオ撮ったけれど自分ではもう限界なので一緒に見てくれないかと投げかけてみてはどうでしょうか。

自分になかった気づきが得られたり、その価値を実感した人が増えていくとその学校でのチーム力につながっていきますし、わざわざ授業研究をしなくても、普段の放課後の職員室で雑談的に相談や話し合いができるようになってくると、占めたものです。そういう環境づくりは簡単ではないかもしれませんが、地道にやっていることはいつか花が咲きます。すごく仲の良い、理解してくれそうな同僚と話してみてください。

Q4: 先生のお話で、記録を取るということが必要になってくるかなと思うのですが、何か良さそうな記録の取り方がありますか。

A4: この子はどうしていつもこんな考え方をするんだろう、ここ本当に見たいっていう場合は、特別画期的なものではないのですが、ビデオカメラとアイパッドとか、あるいは自分のスマートフォンとかを使って、複数の角度からみると良いと思います。

Q5: 私は、子どもの情意面、つまり子どもの気持ちの動きといったものをどんなふうに見とるのかというのは、教師にとって本当に大事なことのひとつではないかと思っているんです。今日はたくさん学生さんが参加してまして、若くて先生になろうという意識の高い方がいっぱいいますので、子どもの心の中で情意面を見とることについて先生がしていってほしいこと、大事だなと思うことがあったら教えてください。

A5: 先生がおっしゃったのは、本当にその通りだと思うんですね。今回お見せした動画では最初からAさんに焦点を当てて撮影していたわけではありません。授業全体を撮っていて、その都度撮影した人が気になったところに焦点を当てながら撮ってくださいということで、3点ぐらいで撮っていました。Aさんが最初に前に出てきた時に合っていますと言われて嬉しそうなお顔をされたのに、違えますって言われてだんだんシュンとなっていって、最後下向いちゃったみたいなところを追えていないんです。もしも一人のお子さんを追いたいのであれば、そのお子さんを撮り続けたいと思います。

小学校の研修会でお話した時には、教室に30人40人いる時に、それぞれが取り上げる場面がバラバラになりすぎて、重ね合わせようと思っても重ね合わせられないんじゃないかという意見も出ました。その時に試したのは、やはり授業者が日ごろから気になっているお子さん、いわゆる対象生徒を決めておき、この子のこの場面をよく見てほしいといったニーズを聞いておいてそこを皆さんに見てもらおう。どんなことに生かしたいかということに応じて、やり方を変えることも必要になるのではないかなと思います。事実と解釈を分けて考えたり、いろんな見方、複数の見方を重ね合わせる。そんなことが根幹にあるのではないかと考えています。

(文責：福島美枝子)

2021 年度第 1 回研究交流サロン

～ 合同研究の始まりと研究交流サロンでの交流記録 ～

子ども育成学部 准教授 河崎 美香
講師 佐部利典彦

2021 年 11 月 10 日、河崎・佐部利ゼミの学生で「輪っかを作って遊ぶ」という実践を学校法人伸和学園堀川幼稚園で行いました。その歩みをご紹介します。

1. 実践の歩み

佐部利は、幼稚園教育実習 I の訪問指導などで堀川幼稚園を訪れた際、色々お話しさせていただく中で園での造形的な活動をする事となり、継続した関わりを持っています。また、本学の卒業生が就業しており、卒業生の保育者と実践することで新たな実践が生まれ、お互いの知見が深まればと考え実践を行ってきました。

2018 年 11 月 8 日は、「のびのびアクションペインティング」。好きな色を好きに混ぜたり飛び散らかしたりして存分にペインティングをしました。



2018 年 11 月 29 日には、「顔ワークショップ」を開催し、顔をテーマに制作を行いました。顔ワークショップに造詣の深い石原瑞穂氏を招いて身近なもので顔を作り、それを集めて自分たちも含めて大きな顔を作りました。



2021年6月29日には紙袋パペットの製作を行いました。紙袋をベースとしてパペットを製作しました。そのパペットを使ってみんなでお話をしました。この実践は『実践につながる新しい教育・保育実習』（谷口征子・大浦賢治/編著 ミネルヴァ書房 2022）に教材として、指導案と共に掲載されました。



1-1. 合同研究の始まり

河崎は、「輪っか」という教材を用いると、子ども達からどのような遊びが創出されるのかというテーマのもと、学生数名の協力を得て子ども役を演じてもらい、活動のシミュレーションを行いました。この実践は『保育・教育の方法と技術』（阿部アサミ・小林祥子/編著 大学図書出版 2022）に掲載されています。学生とシミュレーションしている場面を佐部利先生が見かけられて、「実際に子ども達と実践してみたらどうだろう」と提案してくださいました。そこで、堀川幼稚園のご協力を得て、実践させていただくことになりました。この実践には、インクルーシブ教育に研究の視点をもっている武田瑠美さん（河崎ゼミ）、次郎丸未咲さん（河崎ゼミ）、有井瑞稀さん（佐部利ゼミ）も、観察・記録者として同行しました。

三人の学生はインクルーシブとは何なのかという問いをもっています。学生と教員と現場の保育者が協力体制をつくって実践研究を行おうと考えました。新聞とガムテープを使って輪っかを作り、その輪っかを使って遊ぶという実践になります。幼稚園側とも綿密に打ち合わせを行い、活動のねらい、内容等を決めました。そして子ども達の遊びの様子と個別に支援を必要とする子どもの動きを観察、記録し、必要に応じて支援することになりました。

今回の研究交流サロンではそのときの実践事例を提示し、大学教員それぞれの分野から討議を行いました。その結果、インクルーシブ教育の本質の部分について少し捉えることができたと考えています。

1-2. 武田さんの思い

武田（研究サロンの音声記録より）：

私は2年次の障害児保育の授業で、不器用擬似体験をしました。それは、手先が不器用な子どもの擬似体験で、軍手を二枚ずつ両手にはめ、折り紙で鶴を折るというものです。この授業で行った体験は、私が特別支援教育の道へ進もうと考えるきっかけとなりました。そのとき私が書いた授業の感想には「自分だけみんなについていけずとても焦ったし、諦めたく

もなった。そんなときに周りの友達や先生にまだ終わらないの？下手だねと言われると嫌な気持ちになるだけでなく、どうして自分だけできないのだろうと自信がなくなった。」と書いています。また、「多様な子どもに関わる大人はどんなにうまくできない子がいても、その子は一生懸命やったということを必ず認めて、他の子と比べるような言い方はしてはいけなとと考えています。またクラス全体でその子を笑い者にすることが当たり前のような雰囲気をつくらないことが大切だと考えます。」とも書いています。どういものがインクルーシブなのかってところが私にとってはとても難しく、授業後に河崎先生に質問をした記憶があります。河崎先生は私の質問に対して「インクルーシブって奥深くて、でも曖昧なところがいっぱいあるんだよね」と仰いました。私は、「インクルーシブって曖昧なところがいっぱいあるんだな。でも一体インクルーシブの曖昧さって何だろう。実際の現場はどうなっているのだろう。」と感じました。教員を目指す身として、インクルーシブ教育について学びたいと思いました。2年次のこの授業を機に自分が本当にやりたいことは何なのかってのが見えて、私にスイッチが入りました。

1-3. 河崎先生の思い

河崎（研究サロンの音声記録より）：

武田さんは3年次から河崎ゼミに所属しました。その頃、私（河崎）は研究の一環でインクルーシブ教育で先進的取り組みをしている大阪府の調査をしていました。ちょうど武田さんの卒論テーマとも重なる部分があり、一緒にやりましょうということで、大阪府の教育、福祉分野の先生方や関係職員の方へのインタビュー調査等に武田さんも参加しました。教員は教えることも大切な仕事ですが、それ以上に、知りたいと思う事柄に一生懸命取り組むことがどれほど楽しく意味があることなのかを共に実践していく中で伝えられたらいいなと思っています。学生と教員が対等に思いや考えを出し合い、納得できるまで何度でも話し合う、時間を忘れて研究に没頭したこの二年間の歩みは互いのキャリアアップにつながったのではないかと思います。

武田さんは4年次6月の保育所実習で子ども達と「輪っか」をつくり、音楽に合わせて模倣遊びを行いました。そして、私は10月、「幼児の運動遊びからどのような多様な動きが引き出せるのか」というテーマで研究を行うことになりました。武田さんが模倣遊びで使用した「輪っか」、子ども達はこれを見てどのような遊びを発想し、創り出すのか。武田さんが実習で得た学びを踏まえ、さらに先行研究を調査しながら考えました。そしてこの度、保育現場で実践、検証させていただいた次第です。実践の視点は以下の三点です。

1. 微細運動と粗大運動から、子どもの発達、多様な動きを捉える。
2. どのような遊びを子どもたちは発想し展開するか仮説・検証する。
3. 多様な子どもがいる保育現場の遊びをインクルーシブな視点から捉え直す。



発表の様子（左：武田さん 右：河崎）

1-4. 活動についての観察・支援

河崎（研究サロンの音声記録より）

(1) 導入

輪っかを見せながら「この輪っかを使ってどう遊ぶ？」と発問します。導入で手遊びをすると、歌の中にバスも出てくるし、輪っかを指してハンドルと言ってしまうと乗り物遊びに誘導してしまう恐れがあるため、手遊びなど事前の活動はしないことにしました。メインティーチャーの佐部利先生が全体に向け輪っかの作り方を説明され、その後、子ども達は輪っかの制作を始めました。

(2) 展開

①輪っかのイメージは子どもそれぞれ。新聞紙に巻くカラーテープの長さや数、色の組み合わせ、形も様々で、シンプルな輪っか、バラエティに富んだ輪っかを作る子どもがいますと予想しました。

制作の過程では、微細な手指の動き、目と手・両手の協応動作、制作の手順の理解などが必要になるため、戸惑う子どもも出てくると予想しました。ここが一つ目の観察、支援のポイントです。

②作って遊び始めたら、そのまま流れを止めずに様子を見ました。今回のテーマは遊びの創出なので、子ども達が自分で制作した輪っかから、純粋にどのような遊びを発想していくのかを捉えていきます。ただし、想像力といった点で難しさのある子どもにとっては大変困難なシチュエーションです。ここが二つ目の観察、支援のポイントです。

計画の段階から、あらかじめ環境は設定せず、子ども達からどのような遊びが出てくるかを見て、必要に応じて環境を準備していくことにしました。ここで大切なことは、どの保育者も普段の保育で無理なく準備できる環境でないという意味がないということです。そして、遊びの様子を見て、子どもと一緒に環境を再構成していくこと、ここが自由保育の難しさでもあり、同時に面白さでもあると思います。

子ども達は一つの場所に集まって同じ遊びをするのではなく、それぞれが好きな遊び方を見つけて自由に遊ぶと予想しました。一方で、遊び方が分からない子どもや、友達と一

緒に遊びたくても輪の中に入れないうちが出てきた場合、様子を捉えて支援に入る必要があると考えます。ここが三つ目の観察、支援のポイントです。

実践当日、全体の遊びの様子、出てきた遊びのコーナー、観察対象の子どもの様子を動画で撮らせていただきましたので、それを基に遊びの様子を振り返り、分析しました。

2. 2021 年度 第 1 回子ども育成学部研究交流サロン

2021 年第 1 回子ども育成学部研究交流サロンは上記の「輪っか」の実践について、大学内で共有し、各分野からの視点で討議を行いました。

2-1. 不器用擬似体験

実践の発表・討議の前に、不器用な子どもの感覚と内面の理解のために「軍手を用いた不器用擬似体験」を実際に参加教員全員で受けてみました。写真は、その様子です。



輪っか制作の様子 教員

2-2. 実践発表（実践と分析）



輪っか制作の様子

河崎（研究サロンの音声記録より）：

小さな手で新聞紙を筒状に巻き進める際、巻いた部分がだんだん広がってしまったり、筒状になった新聞紙を輪っかにするときに両手をうまく操作しながらガムテープを切って貼ることが難しかったりする子がいました。そんなとき、自然と友達同士が協力し合う姿がありました。一方、制作活動が盛り上がる中、自分で何度かチャレンジするものの、できないと思ったのか俯いてしまう子がいました。傍に行き、新聞紙を細長く巻くコツを伝えるために、「ギュギュ」と声を出してやり方を示すと、同じように「ギュギュ」と言いながら手指で新聞紙を握り押しさえることができました。新聞紙を巻き進めるときには、新聞紙が広がらないように筒状の端を補助することで、自力でやり遂げることができました。ガムテープを揺れないように固定し、切る面を広げ、少し切れ目を入れてはさみで切るように促すと、成功しました。できたときの喜びの表情がとても印象的でした。また、一つの作業に集中しているために、次の指示に気づかない子もいました。周囲を見回したとき、すでに周りには二本目の輪っかを完成させていて、焦りのためか手指に力が入り過ぎて、二本目の輪っかはぐちゃぐちゃになってしまいました。傍について手順を確認しながら補助すると、安堵し、その後は自分で続けることができました。



輪っかを使って遊ぶ様子

実際に、輪投げ、けんぱ、電車ごっこなど、概ね想定された遊びが展開しました。その中で、遊びのルールを理解できる子どもとできない子どもが存在すること、ルールには関係なくその子のやり方で楽しむ子どもなどクラスの間関係とともに遊びの様子について観察し、必要に応じて支援しました。

子ども達の遊びの様子を見て、印象に残ったことは大きく次の2点です。

- ① 一斉活動における指示が理解できない場合、分からない、できないという意思表示ができず、静かに困っている子どもがいた。周囲の友達の様子を見て、自分のやっていることが合っているのかを確認しながら、一生懸命についていこうとする姿が伺えた。困っている場面で、タイムリーな支援があれば、子どもは遊びをあきらめないで続けられる

のではないか。できた！という小さな成功体験が、もっとやりたい！という挑戦意欲につながり、繰り返し遊ぶ中でその子どものオリジナリティが生まれてくると思われる。

- ② 暗黙のルールがある遊びになると理解ができない部分が生じ、遊び方の違いを友達から指摘されるものの、どのように動いてよいのか分からず戸惑う子どもがいた。一方で、遊び方が違っていても、周りの友達が様子をよく見ていて、その子ができるところは見守り、できないところはさりげなくフォローする姿も見られた。短時間ではあったが、同じ場を共有して遊ぶ子どもの観察力のすごさ、時間をかけて築かれた子ども同士の支え合いの姿、保育者の介入が必要となる場面を知ることができた。

2-3. 実践発表を受けての討議について

佐部利：

研究討議においては、幼保分野の教員から、制作する輪っかの大きさ、素材、はさみなどの道具、ガムテープなどの材料などの設定が適切かどうかという意見が出されました。

それを受けて、社会福祉分野の教員からは、「この設定は、どんどん周りが進んでいって、自分だけが取り残されている状態。理屈抜きで認めることができない、嫌です。」という意見が出されました。その中で、「全員が一つのことを行う必要はないのではないかな？個人がバラバラな活動を各自の興味や関心に合わせて行うという保育の方向もあるのではないかな。」といった意見が出されました。

環境の設定とも関わってくることですが、やはり社会に出た時に必ずしも個別の活動だけではない状況が生まれるということもあります。ではどうしたらいいのかということを考えていくと、教育分野の教員からは、他国の教育との比較であったり、その中で補助の教員の必要性について意見が出されました。「個人個人の学習能力が違うので、体験、経験の試行錯誤を繰り返すことによって学習していく学習能力、これを獲得する時間を保証する必要があるのではないかな？」「支援が必要な子どもとその周りにいる友達との関係性としてどのような関係性が望ましいのか？」という意見が出されました。

またそれらの意見を踏まえて社会福祉分野からは、やはりスクールソーシャルワーカーなどの専門的な人材の配置が必要ではないかという意見が出されました。これらの意見から、インクルーシブ教育について考えるヒントが少し見えてきたような気がしました。

2-4. 見えてきたインクルーシブ教育

河崎：

私たちが住むこの社会は、残念ながら、障害のある子ども達のゆっくりしたペースに合わせて進んでくれるとは限りません。しかし、幼少期から障害のある子どもとない子どもが一緒に過ごしている様子を見てみると、周りの友達の様子を見てさりげなく手を差し伸べる優しいまなざしがあります。また、自分一人ではできないけれどやりたいからここ手伝って、と身振りで伝えて実現していくたくましい姿も見受けられます。子ども達は、人には得意不

得意があることを感じ取りながら、助け合い、時間をかけて少しずつ尊重することを学んでいきます。しかも子どもたちは遊びを通してそれを自然体で学んでいきます。こうした姿は、共に生活する時間を積み重ねたからこそ得られるものなのではないでしょうか。子どもは、インクルーシブな社会を築くための「芽」であり、「希望」です。

仮に、障害のある子どもが幼少期から特別な別の場所で、個別の特別メニューの中だけで過ごしたとしたら、将来社会に出たとき、周囲のあまりの早いスピードに驚いて怖気づいてしまうかもしれません。逆に、幼少期から地域の中で多くの人と関わりながら生きていけば、障害のある子どもも、そうでない子どもも、社会に存在するいろいろな人を見たり実際にかかわり合ったりすることで、子ども達の心の中にインクルーシブに人につき合う土壌ができていくと思うのです。

インクルーシブ教育というのは、子どもと先生とが共に創りあげていくプロセスなのだと思います。子どもには安心して生活できる居場所が必要です。どの子どもにもその子の居場所を保障するためには、集団の中で、誰がどこでつまずき、何に困っているのかを先生がきちんと捉えながら進めていくことが求められます。しかし、それを実現するためには、人手が必要です。子ども達は障害の有無にかかわらず、一人一人違います。その一人一人が持っているダイヤモンドを引き出し、輝くように丁寧に対応するには、一人の先生のみでは限界があります。やはり多くの先生の力が必要なのです。

互いの多様性を認め合い、豊かに生きていくことを教える教育には、時間と手間がかかります。それは、何年もかけて熟成していくようなものなのだとことを忘れてはいけません。多様な子どもたち、多様な先生たちが、出会ってかかわり合うダイナミクス（力動）が起きると、そこに新たなエネルギー、アイディア、幸せが生まれてくるのだと思うのです。

2021 年度第 2 回研究交流サロン



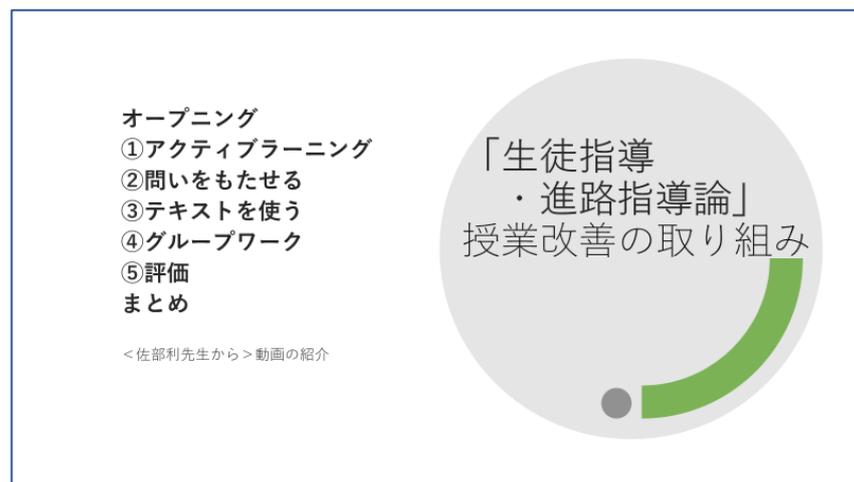
「授業改善
あれこれ」

研究交流サロン

富山国際大学 子ども育成学部
教授 松山 友之



(1)



オープニング

①アクティブラーニング
②問いをもたせる
③テキストを使う
④グループワーク
⑤評価
まとめ

<佐部利先生から>動画の紹介

「生徒指導
・進路指導論」
授業改善の取り組み

松山： 今日、私自身が授業改善にどのように取り組んでいるかをお話したいと思います。特に私の授業の中で「生徒指導・進路指導論」の授業改善の取り組みについて話し、これからの授業改善について話し合うたたき台にさせていただければと思います。ここにある項目を順にお話して行きたいと思います。

オープニング 毎回指定席 違った人と

実社会では誰とでも話せること
人のよさ価値観に気付くことが大事！

話したことのない人が
たくさんいる。

- ジェスチャーゲーム
 - 目で語る
 - あっち向いてホイ・ホイ・ホイ
 - インタビュー
- ソーシャルスキルトレーニングや構成的グループエンカウンター
- 現場で子どもたちと楽しく授業を始める力



前の時間の振り返り 自分の思いを話すこと

(2)

学生の実態として生徒指導の性質上、人間関係作りが重要ですので授業のスタートにはいろいろな工夫をしています。まず毎回席を指定しています。席を指定するというのは、コロナ対応の意味もありますが、学生自身が話したことがない仲間が意外と多いという実態があるからです。多様な人との交流によって考えを広げる学生時代に話したことがない人がいる、もしくは固定された人間関係しか築けていないというのは非常に大きなマイナスです。そこでここにありますようなジェスチャーゲームなど簡単なゲームを通して人間関係づくりを必ず行うようにしています。また、前の時間の振り返り、自分の思いを話すといった機会を増やすようにしています。学生からは「いろいろな意見が聞けた。」「自分と違った考えがあることに驚いた。」という感想が多数見られます。授業改善のベースは人間関係作りから、と考えています。

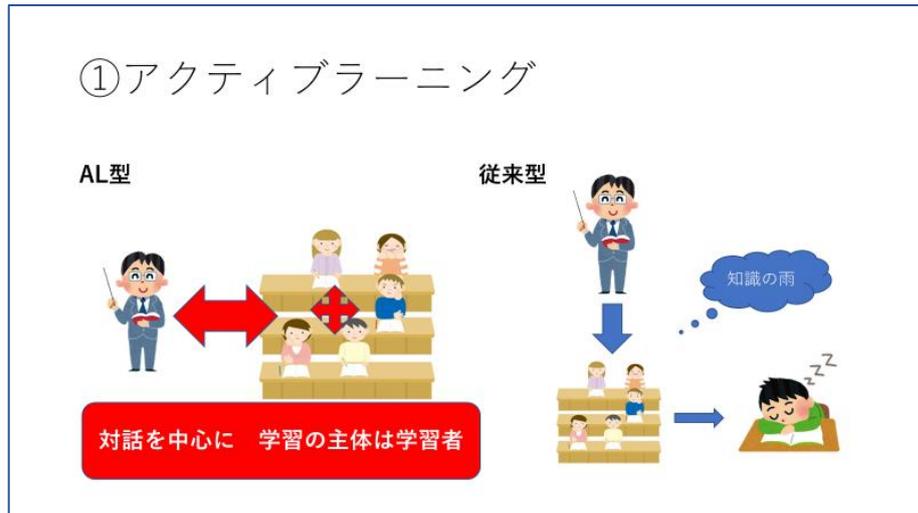
ほぼ毎回メンバー変更

703・704 12月8日 ホワイトボード 生徒指導・進路指導論

空き		空き		空き		空き	
1班	905 37	5班	52 32			9班	12班
7	80	33 65			64 36	6	96
2班	55 17	6班	56 14			10班	14班
89	35	51 71			13 98	60	42
3班	83 18	7班	3 30			28 81	82
8	85	94 90			11班	15班	89
4班	75 20	8班			26 43	24	46
89 83	53 57				10	5	
					12班	16班	
					22 76	23 50	
					4	54	

(3)

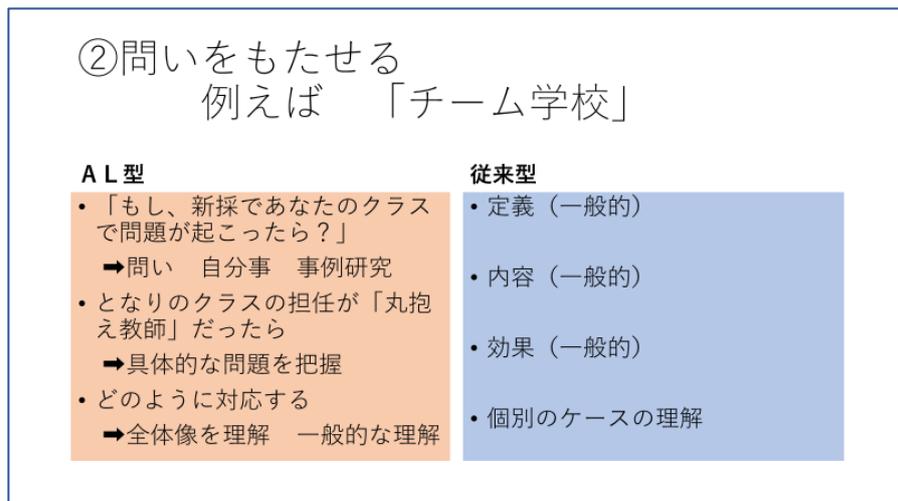
このように、学籍番号でグループを区切って3人から4人のグループで話し合える雰囲気を作っていきます。



(4)

① アクティブラーニング

大学の授業でもアクティブラーニングを行うことが必要です。文部科学省のいう「主体的・対話的で深い学び」に導くための授業が求められています。アクティブラーニング型の授業と言えば、対話を中心に、学習の主体は学習者であるということになります。従来型の授業のように一方的に知識の雨が降るような授業はアクティブラーニングの授業とは言えないことになります。どうやって学生の方から主体的な取り組みが生まれるかまずはアクティブラーニングの形をしっかりと授業に取り入れることが大切だと思っています。一口に対話と言っても、教員と学生、学生相互、人やモノ、歴史上の人物など多様な対話があります。ですから一方的に話す時間をなるべく少なくするように努力をしています。では、このアクティブラーニング型の授業の骨になる部分、核となる部分は何でしょうか。これは、学習者が「問い」をもつことであると私は考えています。



(5)

② 問いをもたせる

このことについて私の考えを少しまとめてみます。例えば、「チーム学校」というテーマで話し合いをします。「もし、新採であなたのクラスで問題が起こったら？」という学生にとって自分事の問いをもたせます。さらに事例をもとに考えます。となりのクラスの担任が「丸抱え教師」で情報を流さなかったら・・・というふう具体的に考えます。そして、自分だったらどのように対応するかを考えた上で、全体像や一般的な理解を学ぶという展開です。これに対して従来型の授業では、定義に始まり一般的な学びを先に行います。自分事ではないためにある意味正しい理解であっても歩留まりが悪い。個別のケースについて考える段階でも浅い理解で終わってしまうと考えます。アクティブラーニング型の授業では、自分にとって必要な学びで深く理解したことが自分と結びつき、さらに調べたいと考えます。このようにもっと学びたいと思うためには「問い」をもたせ自分事の学びにすることが大切であると思います。

③ テキストの使い方・・・

- いろいろ試して・・・
- 何ページ読んできて・・・

穴埋めに落ち着く・・・
※よいか悪いか分かりません。

小・中・高 12年間の学びで
一番落ち着くのが穴埋め？

生徒指導論・道徳指導論 第13回 いじめ②

学籍番号: 学年: 氏名:

1. 前時の振り返り
グループでの意見交換ノック

第1部 いじめの全般的動向

●「いじめ」の定義
「一党の人権侵害のある者から、心理的・物理的な_____を受けたことにより、_____を感じているもの。なお、起こった場所は学校の_____を問わず。」(平成18年、2006)
→誰もが被害者にも加害者にもなりえる。」

2013(平成25年)「_____」が成立し、9月28日に施行された。」

●認知(発生)件数
→資料から

●学年別のいじめ認知件数
小学校2年生までは()、3～6年で()するもの中学校1年生で再度()

第2部

●いじめの発生率
「悪い状態にいられている状態にある」小学生で()%、中学生で()%
小学校では各学年に()、いじめは「_____」という異議で対応。

●学級集団の状況によって大きく異なるいじめの出現率
「かたき臭い学級集団」
「ゆるみの見られる学級集団」

(6)

③ テキストの使い方

ただし、実際この「問い」を持たせる授業を進めているとどうしても学生の感覚的な理解が中心になって話が深まらない時があります。そのためにはテキストを正確に使って必要な知識もしくは理解を深める必要があります。今までも従来型の授業でテキストを読んで来なさいとか、予習してきてそれについて話し合いなさいというパターンも多いと思いますが、非常に多くの科目を受講している本学部の学生にとってはなかなか予習の時間というのが取れません。そこでテキストの重要なところを穴埋め問題にして短時間で確認ができるようにしています。この理解があって自分事の学びの根拠が明確になるわけで、穴埋めにすることでテキストも大切にしながら効果的に授業を進めることができるようになったと考えています。(言い方が悪いですが、小中高12年間の学びで一番落ち着くのが穴埋めということなのかもしれません。)

④グループワーク

- 一人学び (1人)
- ↓
- グループ討議 (4人)
- ↓
- ミニ発表会 (16人)

703-704 12月8日 ホワイトボード 生徒指導・進路指導

学年	1班	2班	3班	4班	5班	6班	7班	8班	9班	10班	11班	12班	
1班	905	37							271	99		82	97
2班	71	80	33	65					64	36		6	96
3班	55	17	56	14					131	69		86	42
4班	86	32	57	71					28	81		92	89
5班	93	18	3	30					26	43		24	46
6班	81	83	84	90					10			5	
7班	75	20	73	21					22	76		23	50
8班	69	83	53	37					41			54	
9班													
10班													
11班													
12班													

(7)

④ グループワーク

次にグループワークも毎時間行っています。グループワークでは次のようなパターンで学びを深めるようにしています。まずは「一人学び」です。自分で自分の考えをまとめる時間を取らなければ話し合うという活動の内容が浅くなります。毎回短時間でも自分で考える時間「ひとり学び」の時間は必ず必要となります。その学びを受けて4人程度で「グループ討議」を行ないます。ここで学生は自分以外の考えに初めて触れることになります。学生の振り返りなどを見ていますと、非常に多くの情報をここで得ていることが分かります。さらにもっと多くの情報交換をするために、60人近い受講者なのですがそれを4つのグループに分けて「ミニ発表会」を行ないます。大きく4つのグループで発表を行ないますが、ここでさらに多様な意見を聞くことで考えを深めていくことができるようになります。また、発表する場を作ることで、プレゼンテーション能力を高めることにもつながります。

事例研究 一人学び➡

<事例研究2> ●次の事例について、あなたがA先生ならどのように対応しますか。

2年目のA先生は、昨年は3年生の副担任でしたが、今年は4年生の担任になりました。今年異動してきたお母さんのようなベテランのB先生と二人で同じ学年をもつことになりました。顔の分かる子どもたちでA先生は楽しく頑張っていました。

6月ごろ、C子が何か元気が無く思い聞いてもあまり話しません。心配になったのでB先生に相談しました。するとB先生は「C子のお父さんが病気で入院してお母さんが付添いでたいへんらしいよ。おばあさんと1年生の妹だけでC子は寂しいんじゃないかな。」と様子を聞かせてくれました。5月の家庭訪問でもお母さんからは聞いていません。なぜ話してくれなかったのか不安になりました。

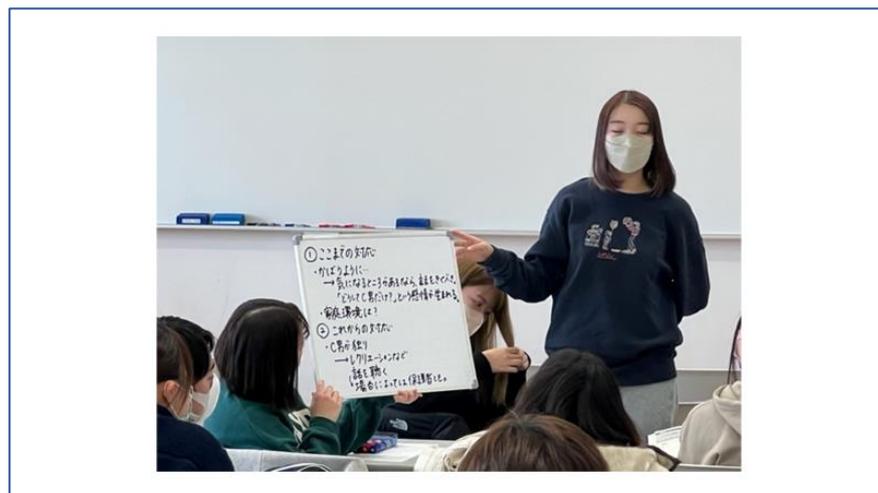
(8)

例えば、次のような事例研究を行います。「あなたがA先生だったらどうしますか」と言う課題を出していきます。この課題についても一人学びから始まり、事例の問題点を洗い出し、自分がA先生ならばと自分事することでどのように取り組むのか、どのように解決に向かって進めばいいのかをまとめていきます。この学びはアクティブラーニング型の授業であり、自分の考えをグループで広め、そして考えるという学びになっています。この事例研究では、非常に顔の広いB先生と学年を組んだ場合の若いA先生の困り感を問題としています。すでに「チーム学校」で言われているように、すべてを丸抱えしている教師は必要とされません。全員が同じベクトルで情報を共有し、問題に立ち向かう教師集団をどう作るかを自分事の学びを通して考えていきます。



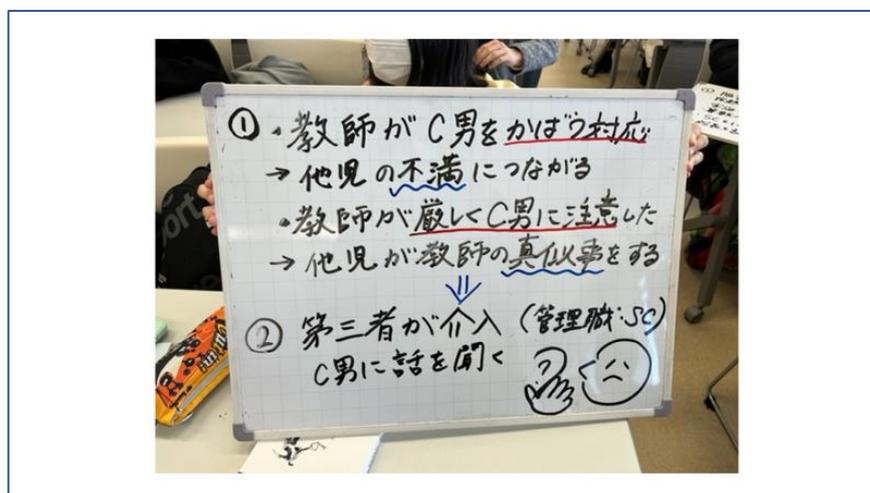
(9)

ミニ発表会の様子です。ホワイトボードに自分たちのグループで考えたことをまとめ紹介して行きます。他のグループはそれを聞きながら分かりにくいところ質問したりして学びを深めていきます



(10)

発表する学生にとっても、自ら説明し他のグループに考えを伝える場を作ることで、主体的に授業に参加する意識が育っていきます。



(11)

先程の課題に対して、このグループでは、教師が特定の子供を庇うことは他の児童の不満につながるのではないかと考えた。しかし厳しく注意したらこの教師の姿勢をほかの子どもたちが逆に真似することにもなるのではないかと考えた。このような子どもの視点に立ったものの見方が出てきます。そこで、自分ひとりで解決するのではなく管理職、スクールカウンセラーとも協力して対応することが必要ではないかと結論づけています。このような思考は現場で自分がかんじた情報をどう伝えるかという意味でも非常に重要です。このような具体的なところまで考えることでテキストに書かれている生徒指導の機能の意味がさらに明確になり、自分ならどうする、自分だったらその場合どう動けばいいのかという自分事の学びへと広がっていきます。

事例研究

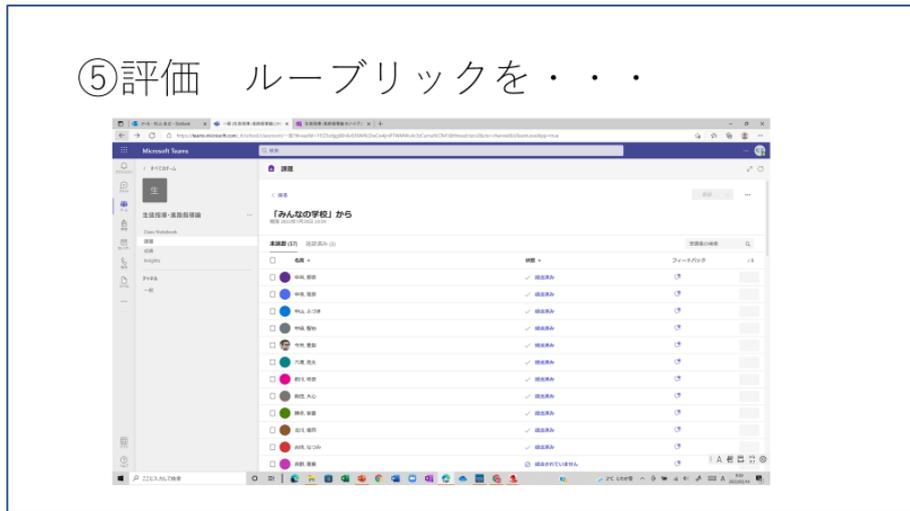
● ロールプレイ (役割演技)

養護の先生に用事があって、保健室の戸を開けると長椅子に半年ほど不登校だった隣のクラスの和夫(かずお)が座っていました。前に運動会の用具係と一緒にしたことがあり、とてもまじめに係の仕事をしてくれたことを覚えています。隣の担任の先生からは、家の中がうまくいっていないようだとは聞いています。さてこの後どのように接しますか。保健室での一コマを役割演技してみましょう。

(12)

また事例研究ではこのようなアクティブラーニング型の授業としてロールプレーも行うことがあります。例えば、保健室の養護の先生に用事があって戸を開けると不登校の子どもが居たらどのように声をかければよいかを役割演技で考えます。実はこのようなケースは学校でもよくあります。自分が教師だったら、自分が不登校の子供だったら・・・立場を変えて役割演技をしてみることでさらに自分事としての学びを深めることができるようになります。

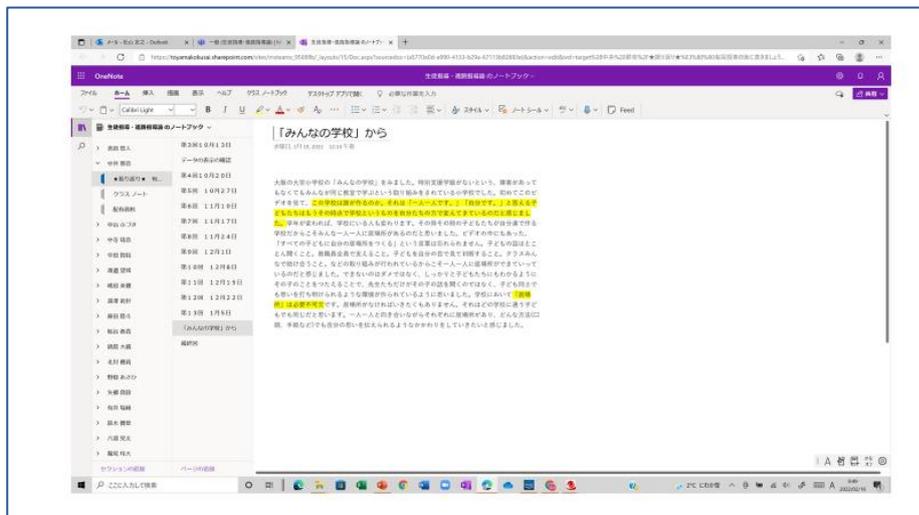
⑤評価 ルーブリックを・・・



(13)

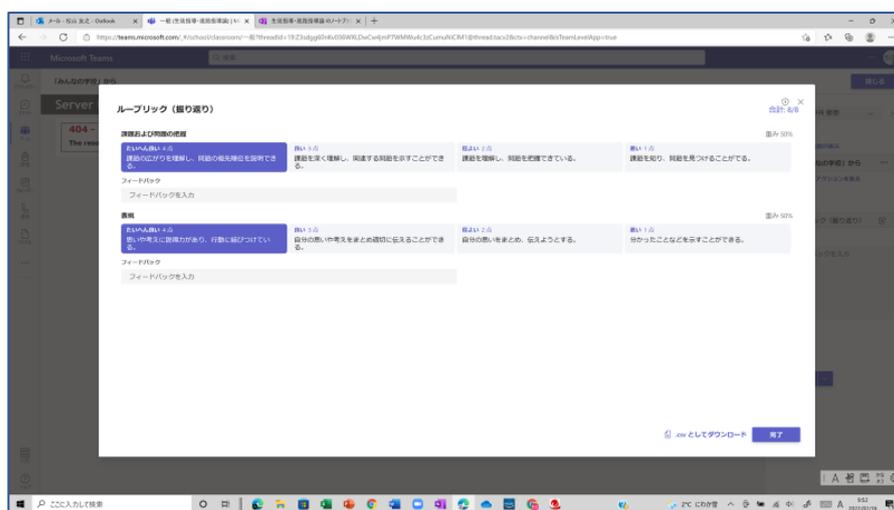
⑤ 評価

さてこのような学びをどのように評価するか。評価活動というのが授業では大変難しい問題があります。ここで Teams のルーブリック機能を使って評価を行ってみました。ルーブリックについては以前から学務部で提案されているものを元に自分なりに作り直してみました。これは富山県寄附講義の「みんなの学校」を受講した学生たちをどのように評価したかという事例です。学生からのレポートを基に評価を行っていきます。



(14)

毎回多様なレポートが提出されますので読むのが大変なのですが、非常に優れた感想、優れた考え方、全く違った見方がある大変面白いレポートになっています。大変優れていると思う記述については、アンダーラインをつけて学生たちにフィードバックすることが可能です。



(15)

Teams のループリットでは、このように自分の設定した点数に応じて項目ごとに合計点を出すことが可能です。機械的に操作できる場所もありますので点数化の上では非常に効率的だと考えています。ただ大切なのは学生のフィードバックですので、コメントを書いて返すのはとても大変なのですが少しずつ取り組んでみました。これについても何かよい方法はないかこれからも検討を続けていきたいと考えています。

後期の評価

授業アンケート計算結果					科目名	生徒指導・進路指導論				
					教員名	松山 友之				
		回答1	回答2	回答3	回答4	無回答	平均	合計	有効回答数	全回答数
5	問1	0	0	10	38	0	3.79	182	48	48
6	問2	0	0	12	36	0	3.75	180	48	48
7	問3	0	0	12	36	0	3.75	180	48	48
8	問4	0	0	4	44	0	3.92	188	48	48
9	問5	下記表参照				1				
10	問6(1)	0	0	19	28	1	3.60	169	47	48
11	問6(2)	0	0	0	0	48	-	0	0	48
12	問6(3)	0	0	0	0	48	-	0	0	48
13	問6(4)	0	0	0	0	48	-	0	0	48
14	問6(5)	0	0	0	0	48	-	0	0	48
15	問7	0	0	7	41	0	3.85	185	48	48

(16)

今回、「生徒指導・進路指導論」の授業における学生の授業評価アンケートのデータから授業全体の評価を考えてみます。授業全般の評価（問7）については4段階で3.85ですので高い評価だと思います。教師の情熱については（問4）で、3.92と高い値で自分なりに頑張ったことが学生のみなさんには伝わっているのではないかと考えています。アンケートなので疑問が残る点がありますが、よい評価をもらった事に満足するのではなく、どのようにすれば更に学生のみなさんにとって「主体的・対話的で深い学び」になるかを考え、工夫して取り組んでいく必要があると感じています。

- ・ 毎回話し合いのメンバーが違うことで、より多くの色々な人と関わることができることも、様々な意見を交換し合うことができ自分自身の考え方の幅が広がったような気がします。また、水上先生の特別講義でも多く貴重な話をたくさん聞かせていただきました。最後にも山先生と色々な話をしたりすることができて楽しかったです。これからも廊下であった時とかに話をしたいなと思っています。ありがとうございました！
- ・ 教員になるうえで一番心配な生徒指導について事例などを交えて考えることができるいい機会になってとても有意義な授業でした。
- ・ 先生の考えを聞くことに対していつも興味があり、毎回、有意義の授業となっていました。ありがとうございました。
- ・ 自分が教師になるために必要になり、教師になる時に役立つこと、本当に素敵なこと、素晴らしいことをたくさん聞けて勉強になりました。子どもたちの気持ちかわかる先生になりたいです。先生またいい話をたくさん聞かせて子どもたちを一番考えられる先生になりたいです。
- ・ **心と気持ちを先生に伝えて、他人の人間関係や家庭の雰囲気などを聞きをしることで場を盛り上げることができた。**
- ・ 半年の間、最後の方はリポートになってしまいましたが、いじめや不登校、自殺、学級経営、生徒指導についてなどさまざまなことを学ぶことができました。ありがとうございました。
- ・ 1時間1時間の話の内容がとても貴重で、素敵な授業だった。
- ・ 授業ありがとうございました。とても興味深い授業でした。教員としての仕事以外にも保育や施設などでもこの授業のことが役に立つと通して学んだことも色々な話を聞きたいと思える授業でした。子どもたちのために大人がどうにかかわることができるのが、今後も授業を聞いてみたいです。
- ・ **先生の熱意のある授業やグループで話し合った友達との意見を打たれて、自分を振り返ったり、新しい学びの良いきっかけになりました。**子ども達が学校が楽しいと思えるような先生になりたいなと思いました。15回の講義ありがとうございました。とても楽しかったです。
- ・ 先生の経験などからより具体的に考えることができました。また、事例を通して場面を想像することで実際に起こった場合はこんなふうな対応が適切だと感じる事ができました。ありがとうございました。
- ・ この生徒指導論の授業は、これまで受けてきた授業の中で一番心に響いた。想像したりするのを、自分の授業で大切にしたいと思うことが多かったです。ありがとうございました。
- ・ 教育現場に立つ際に大切なことや参考になる話をたくさんしていただき、自分の理想の教師像を具体的にイメージすることができました。授業ありがとうございました！

(17)

学生の皆さんの授業が終わった後の感想です。毎回話し合いのメンバーが違うことで「より多くのいろいろな人と関わることができる」を書いている学生がいます。この点も私が最も大切にやってきたことの一つなので効果があったのではないかなと考えています。「事例を交えて考えることができる良い機会になった」と述べている感想もありました。具体的な事例をあげて考えることは自分事として考えることにもつながります。一般的な知識としての事例を伝えるのではなく自分ならどうするかという視点を必ずもたせるように今後も工夫していきたいと思います。なかなか作業は大変なのですが、このように感想の中にたくさん私の意図することが出てくることはとても嬉しいことでした。

まとめ

- 歩留まり 職業として 教師は経験とカン
- 思考力・判断力・表現力→知識・技能→学びに向かう力人間性
- 学生が違えば全て違うので、また授業改善

全て忘れて、最後に残ったことが教育だ。

(18)

最後に、大学の授業でどれだけ学生の中に学修したことが残るかということがこれからの学びでは求められてくるのではないかと思います。歩留まりで考えるのは間違っているかもしれませんが、教師としては経験と勘を働かせ、どれぐらい学生の中に学修したことが残っているのかを学生の姿から見取る力が必要になります。特に思考力・判断力・表現力といったものが育つ過程で自分事の学びに知識・技能が結びつき、学びに向かう力や人間性が生まれてくると私は考えています。とすれば、常に自分事として問いをもって学生が考える授業、そして自分で学んだことをもとに意思決定できるようにする学びが必要になると思います。そして、それをどう人に伝えるか？効果的に伝える力がさらに必要になります。そのような将来を見通した授業を構築していくことが求められていると思います。最後に、学生は毎年違います。同じ授業は二度と起こりません。今年もまた学生の雰囲気を考えながら授業改善に取り組んでいくつもりです。座右の銘としていつも大事にしているのは、「すべて忘れて、最後に残ったことが教育だ。」という言葉です。授業改善は学生の主体的な学びを深めることにつながります。常に授業改善を怠らず、学生たちが最後にそれぞれ自分の人生の柱となるような考え方をもつことができると考えています。これからも研究を進めていこうと思います。よろしくお願いいたします。

子ども育成学部公開講座のあゆみ

◆H20. 12. 21 子ども育成学部創設記念セミナー

*テーマ「明日の地域を創る子ども育成」

- 記念講演「これからの教育と子ども育成」
寺尾慎一（福岡教育大学教授）
- 記念講演「これからの福祉と子ども育成」
炭谷 茂（(福)恩賜財団済生会理事長）
- パネルディスカッション「子ども育成学部への期待」
寺尾慎一（福岡教育大学教授）
炭谷 茂（(福)恩賜財団済生会理事長）
田中忠治（富山国際大学学長）
宮田伸朗（子ども育成学部長予定者）

◆H21. 9. 26 子ども育成学部開設記念フォーラム

*テーマ「明日の地域を拓く子ども育成」

- 記念講演「明日の地域を拓く子ども育成」
大橋謙策（日本社会事業大学学長）
- トークセッション「子ども育成学部への期待と課題」
谷内早苗（富山県保育士会前会長）
上田雅浩（富山県私立幼稚園協会会長）
田畑 章（富山県小学校教育研究会社会科部長）
品川洋介（富山県社会福祉士会会長）
宮田伸朗（子ども育成学部長）

◆H21. 12. 5 子ども育成学部第1回公開セミナー

- 講演「子どもの世界～子どもはいかにして学び育つか～」
嶋野道弘（文教大学教授）

◆H22. 10. 9 第2回子ども育成フォーラム

- 講演「子どもの鼻の穴のふくらみに夢をかけて」
小林毅夫（前上越市教育長・上越教育大学教授）
- 対談「子ども育成の真髄に迫る」
小林毅夫（前上越市教育長・上越教育大学教授）
水上義行（子ども育成学部教授）

◆H22. 12. 4 子ども育成学部第2回公開セミナー

*テーマ「教育と福祉の協働～スクールソーシャルワークの可能性～」

- 講演「教育と福祉の協働～スクールソーシャルワークの可能性～」
山野則子（大阪府立大学大学院教授）
- 事業説明「富山県におけるスクールソーシャルワーク活用事業について」
矢谷義一（富山県教育委員会指導主事）
- 事業説明「富山県におけるスクールソーシャルワーク実践」
平野由紀子（富山県教育委員会スクールソーシャルワーカー）

◆H23. 6. 11 第3回子ども育成フォーラム

- 講演「子ども・子育て新システムがめざすもの」
山縣文治（大阪市立大学生活科学部／大学院生活科学研究科教授）

◆H23. 12. 3 子ども育成学部第3回公開セミナー

*テーマ「『子ども園』のゆくえと子ども育成」

- 基調報告『子ども・子育て新システム』の動向と課題
開 仁志（子ども育成学部 准教授）
- シンポジウム『『子ども園』のゆくえ』
シンポジスト
蜷川徳子（同朋こども園 園長）
牧野三枝子（じんぼ保育園 園長）
開 仁志（子ども育成学部准教授）
- コーディネーター
水田聖一（子ども育成学部教授）

◆H24. 6. 30 第4回子ども育成フォーラム

*テーマ「幼保小の連携と子ども育成」

- 講演「幼保小の連携・接続～確かな保育・教育の実現を目指して～」
小林宏己（早稲田大学教育・総合科学学術院教授）

◆H24. 12. 1 子ども育成学部第4回公開セミナー

*テーマ「いじめ問題と子ども育成」

- 基調報告「いじめをめぐる現状と課題」
村上 満（子ども育成学部講師）
- シンポジウム「いじめをなくすために何が必要か」
シンポジスト
長井 忍（射水市立小杉小学校校長）
浅野朱実（富山県PTA連合会副会長）
村上 満（子ども育成学部講師）
- コーディネーター
水上義行（子ども育成学部教授）

◆H25. 6. 29 第5回子ども育成フォーラム

*テーマ「共存・共生のための特別支援教育と発達障害」

- 講演「共生社会の形成に向けた特別支援教育の推進」
宮崎英憲（東洋大学参与 東洋大学名誉教授）

◆H26. 2. 15 子ども育成学部第5回公開セミナー

*テーマ「子ども育成における多文化共生」

- 報告「保育所・小学校・ボランティア活動における支援の現状と課題」
シンポジウム「外国にルーツを持つ子どもたちへの支援の在り方」
報告者&シンポジスト
作道純子（射水市子育て支援課主幹）
稲垣妙子（高岡市立野村小学校校長）
米田哲雄（「勉強お助け隊」代表）
福島美枝子（子ども育成学部教授）
- コーディネーター
彼谷 環（子ども育成学部准教授）

◆H26. 7. 5 第6回子ども育成フォーラム

*テーマ「小学校における英語教育」

講演「小学校英語教育の現状・課題と今後の『発展』に備えて」
新里眞男（関西外国語大学教授）

◆H26. 11. 15 子ども育成学部第6回公開セミナー

*テーマ「どう育てる どう育つ 子ども育成の専門職」

パネルディスカッション

「どう育てる どう育つ 子ども育成の専門職」

パネリスト

佐々木美紀子（富山市立西田地方保育所所長
富山市保育連盟副会長）

高木要志男（富山市立堀川小学校校長
富山県小学校教育研究会会長）

室林孝嗣（子ども育成学部准教授 子ども育成学部
実習指導センター長）

コーディネーター

宮田伸朗（子ども育成学部学部長 教授）

卒業生体験報告

「大学での学び・現場での経験・育ち」

高嶋夏希（富山市立愛宕保育所保育士）

中山恵理（立山町立利田小学校教諭）

◆H27. 6. 28 第7回子ども育成フォーラム

*テーマ「放課後の子どもたちを健全に育てるために」

講演「子どもの権利から考える放課後施策の課題
～諸外国の政策動向をふまえて～」

池本美香（㈱日本総合研究所 調査部主任研究員）

◆H27. 11. 28 第7回公開セミナー

*テーマ「発達障害のある子どもたちを巡る幼保・小の現状と連携・接続の課題」

基調報告「円滑な接続を目指した幼保・小の連携」

坂井由紀子（富山県西部教育事務所 特別支援教育指導員）

シンポジウム

シンポジスト

福江厚啓（小矢部市立津沢小学校教諭）

萩中由佳子（富山市立雲雀ヶ丘保育所所長、富山
県保育士会会長）

桂井朋子（高岡市きずな子ども発達支援センター
発達支援室室長）

コーディネーター

村上 満（子ども育成学部教授）

◆H28. 6. 18 第8回公開フォーラム

*テーマ「子供の規範意識を育てるために」

講演「子供規範意識 ～芽生えと形成～」

神長美津子（國學院大学 教授）

◆H28. 11. 26 第8回公開セミナー

*テーマ「『伝え合う力』を育むために ～子どもの育成の専門職に求められるもの～」

シンポジスト報告「子どもたちの伝え合う力の現状と理解

育むための工夫や手立て」

シンポジスト

鳥内禎久（高岡教育委員会 教育次長・学校教育課長）

波岡千穂（伸和学園堀川幼稚園 副園長 富山県私立
幼稚園・認定こども園協会 教育研究委
員長）

屋敷夕貴（宮田校下児童育成クラブ 主事兼支援員）

コーディネーター

彼谷 環（子ども育成学部教授）

◆H29. 7. 2 第9回公開フォーラム

*テーマ「主体的学びの時代の子どもと教師」

講演「主体的学びの時代の教師のリーダーシップ」

赤坂真二（上越教育大学教職大学院 教授）

◆H29. 11. 26 第9回公開セミナー

*テーマ「考えよう！子どもの人権 ～子ども育成の現場でできること」

シンポジスト報告「子どもたちと関わる現場から見えてく
るもの」

シンポジスト

宮田 隼（コミュニティハウスひとのま代表）

中塩真巳（臨床心理士・スクールカウンセラー ほん
だクリニック所属 富山県臨床心理士会
長）

座長 村上 満（子ども育成学部教授）

◆H30. 11. 23 第10回子ども育成フォーラム

*テーマ「グローバル時代に育つ子どもたちの資質・能力」

講演「グローバル時代の対話力を育む」

多田孝志（金沢学院大学 教授）

◆R1. 8. 3 子ども育成学部創立10周年記念・第11回子ども育成フォーラム

*テーマ「学校ってなんだろう」

講演「学校ってなんだろう」

刈谷剛彦（オックスフォード大学及びニッサン日本問
題研究所 教授）

◆R. 3. 20 富山国際大学開学三十周年記念 第12回子ども育成フォーラム

*テーマ「コロナ禍における学校教育 ～ICTの活用～」

講演「コロナ禍における学校教育 ～ICTの活用～」

小田仁洋（富山市立速星中学校 教頭）

◆R. 11. 27 第13回子ども育成フォーラム

*テーマ「教育や保育の実践に生かす特別支援教育の視点」

講演「子供の主体的な学びに寄り添いながら、一人ひとり

『できた！わかった！』へ誘う教師の『授業デザイ
ン力』～ 特別支援教育の視点を踏まえて～」

柳川公美子（富山総合支援学校教諭）

2021 年度 研究交流活動年報

編集：富山国際大学 子ども育成研究交流センター委員会

発行者：富山国際大学子ども育成学部

発行日：2022年8月10日
